患者さんとの対話で拓く

創薬の未来

失って初めて、"当たり前"の大切さに気づく。健康であることや、症状に合う治療法があることは、人生100年時代にあってますます大切になってくるだろう。中外製薬は今、私たち一人ひとりのニーズに向き合う新しい創薬に力を入れる。「患者中心」をキーワードにした、その取り組みとは。

取材日：2022年11月4日

「患者さんが中心」
一人ひとりが、最適な治療を選択できる医療

一般用医薬品や医療用医薬品を使うことはあっても、製薬会社と接点を持ったり意識したりする人はあまりいないだろう。薬のつくり手として、そんなあり方に疑問を持ったのが中外製薬だ。「製薬会社は患者さんのために仕事をしているはずなのに、患者さんとの距離が遠かった。欧米などで進んでいるPPI（患者・市民参画）を取り入れながら、改めて社会課題に向き合わなければ」と同社の渉外調査部パブリックアフェアーズグループマネジャー山瀬博之氏は話す。

この取り組みに対する同社の意識は、2019年にミッションステートメントを再定義したことでも分かる。創業以来の「患者中心」を、第一の価値観として位置づけ、患者さんの真のニーズを追求する姿勢を明確にした。創薬、疾患啓発、また患者さんの医療参画など、これによりさまざまなプロジェクトが動き始めている。

中外製薬株式会社
渉外調査部
パブリックアフェアーズグループ
マネジャー
山瀬 博之氏

「最終的に目指すのは、患者さん一人ひとりが最適な治療を選択できる医療。そのためには、患者団体との協働が必要不可欠であり、3本の柱を軸に相互理解を目指しています」。その3本の柱とは、患者さんの声を研究開発に活かし最適な薬を届ける「患者さんにとっての製品価値最大化」、患者さん自身が病気や治療の正しい知識をもって最適な治療を選ぶための「患者さんのリテラシー*1 向上のための疾患啓発」、そして医療に関して患者さんが声を挙げていくための「患者さんの医療参画のアドボカシー*2 活動支援」だ。

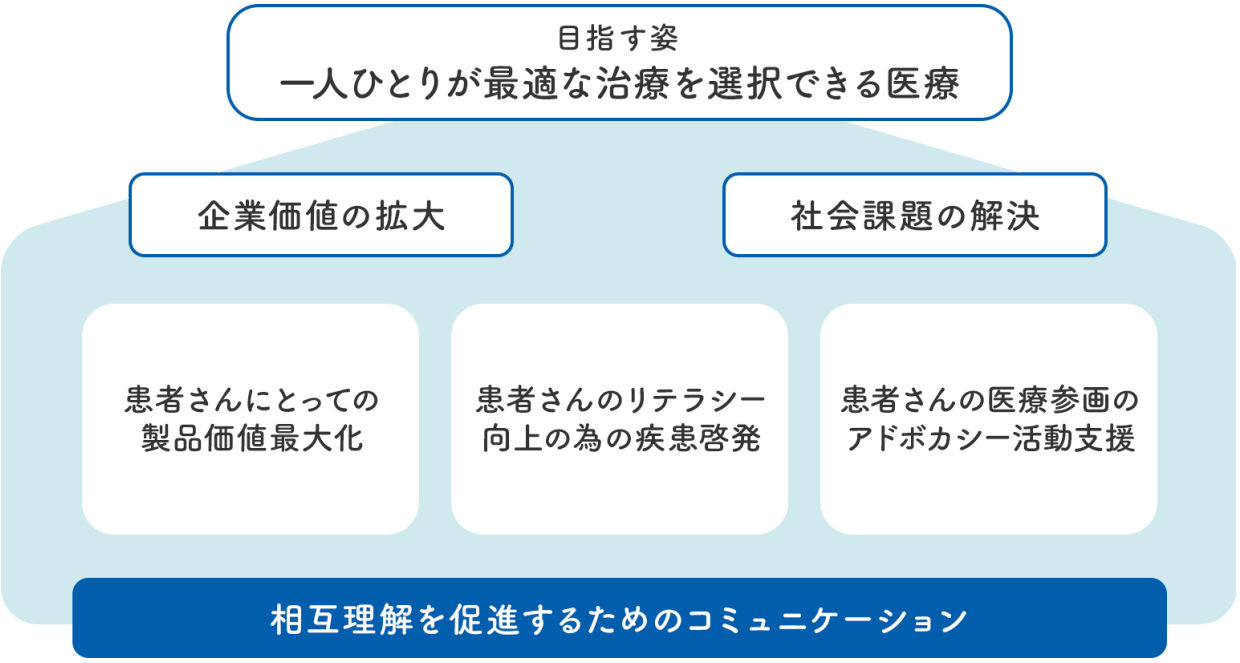
そしてこれらを具現化した取り組みとして、患者団体の方々とトップの"Dialogue"（対話）が注目を集めている。

*1　知識や情報を活用できる能力

*2　権利擁護・代弁

『患者団体との協働』における中外製薬の3本柱

『患者団体との協働』において、3本柱を軸に一人ひとりが最適な治療を選択できる医療を目指す



対話の場“Dialogue”
患者団体と共有した課題を具体的なアクションに

「Dialogue（以下、ダイアログ）」は、患者団体の代表者と中外製薬のCEOが、それぞれの立場で感じている医療の課題を共有しながら目線を合わせていく画期的な取り組みだ。

初開催は2020年の10月で、がん患者団体の代表14人と小坂達朗前CEO（現特別顧問）が討論。①患者さんにとって価値ある薬とは、②PPIを進めるために必要なこと、③社会課題解決に向けた企業と患者団体の協働をテーマに意見交換した。2021年にはがん以外の患者団体の代表にも参加いただき、奥田修CEOと①医薬品開発への患者さんの参画、②情報提供のあり方について議論を行った。「ダイアログで出た論点を整理し、課題に対する改善や新たな取り組みが行われ、次回ダイアログで報告するという流れがあるのは、この取り組みの特徴といえるだろう」と山瀬氏は話す。

例えば、情報提供のあり方については、ダイアログでの議論を受けて、社内で12部門横断的に取り組む「情報提供プロジェクト」を2021年にスタート。患者さんにとって必要な情報をいかに適切な形でタイムリーに提供できるかを検討し、検討結果をダイアログで報告しながら活動を展開している。

Dialogue2021の様子

日本では珍しい取り組みとあって、患者団体からは「エポックメイキング」と高く評価されているという。ダイアログは2022年も継続して開催されており、患者団体、アカデミア、医療者と参加者の幅を広げている。一度きりではない取り組みの継続こそ、文字通り「対話」を交わす姿勢の表れとなっている。

患者さん×創薬研究“PHARMONY”
対話でつかむ真のニーズ

中外製薬株式会社
創薬薬理研究部 部長
北沢 剛久氏

ダイアログの課題の一つに患者団体と研究者との対話があった。「製品になってからだと、意見を伝えても反映されにくい」という患者さんの声を受け、患者団体と研究者のダイアログを実施。2021年12月、患者団体の代表者4人と、自社の研究者4人が対面でディスカッションを行った。

「私たちは日々知恵を振り絞って、患者さんやご家族に喜んでいただくことを夢に、研究に励んでおります。しかし一方で、当事者でなければ分からないニーズに、直接触れる機会はありませんでした」と話すのは創薬薬理研究部部長の北沢剛久氏。「何に困っているのか、今何が見えているのかを、患者さんの方々とお話しできるならば、新薬を考える引き出しを質的にも量的にも増やせるのです」。まさに、培った創薬技術力と真のニーズが出会う場となりうるのだ。

さらに当日、患者団体側からも同社の現場の取り組みを知れてよかったと喜ぶ声が聞かれたという。「症例数の少ない疾患を抱えている方の中には、需要が少ないために自身の疾患への創薬には取り組んでもらえないのではと不安に思っている方もいらっしゃいます。実は私たちの研究は失敗ばかりで新薬に辿り着く研究はごく一部ということ、そして多くの失敗の一つにそうした疾患の研究もあったことを参加した研究員がお話ししました。疑問が晴れ、患者さん側にとっても有意義な場になったのだと感じました」。

多くの収穫があったこのダイアログを起点として、創薬研究に患者さんの声を活かす活動は一層元気になってきた。2022年2月からはプロジェクトを立ち上げ、新たなスキーム「PHARMONY（ファーモニー）」を構築した。Patients（患者）×Pharma（製薬会社）×Harmony（ハーモニー）に由来し、「中外製薬が患者さん・ご家族の声を聞き、互いの考えへの尊重・理解を図りながら、患者さんのための創薬研究をともに目指していきたいと命名しました」と力を籠める。いくつかのトライアルを経て、創薬研究ステージにおいて患者団体と協働を進めるための活動ガイドを作成。協働で得られ

た患者視点だからこその知見を蓄積し、今後の創薬研究に活かしていく。

患者団体の目線から見る“PHARMONY”

希少がんの進む道のりに見えた光明

一般社団法人 日本希少がん患者会ネットワーク
副理事長　**大西 啓之**様

私たち患者・家族の生の声を直接、研究者に届ける機会を与えていただいた中外製薬様のPPI活動の本気度に感激いたしました。このような対話がさらに拡がり、このPHARMONYが、稀であるがゆえに遅れている希少がんの治療薬開発のきっかけになってくれることを期待するとともに、今後も私たちは研究者を応援していきたい。

業界、立場の垣根を越えてさらなる前進を期待

一般社団法人 CSRプロジェクト
代表理事　**桜井 なおみ**様

「創造で、想像を超える。」は中外製薬のスローガンです。「超える」には「数量や基準、限度などを上回る」意味があり、企業としては必須なものだと思います。でもこれからは「"超える"を"越えて"」欲しいと思います。「越える」には「時間、場所、境界を越えて"先へ行く"」という意味があります。このPHARMONYが、部署や業界を越え、聴衆とともに最高の音楽が生まれることに期待します！

希少・難治性疾患領域の「ない」を「ある」へ

特定非営利活動法人 ASrid
理事長　**西村 由希子**様

私達が関わっている希少・難治性疾患領域には、たくさんの「少ない」や「ない」項目があります。これらを「ある」の方向に進めていくためには、患者さんやご家族の声や想い、データがとても重要です。PHARMONYは、患者さん・ご家族と製薬企業が研究開発のうえでチームとなるためにつくられたスキームです。ご縁がありましたら、ぜひチームに加わってください。

患者さんと製薬会社はパートナー
創薬の未来を共創していく

今求められるのは、誰もが尊重され、一人ひとりが最適な医療を受けられる社会。

一方通行ではなく、パートナーとして患者さんと対話を続けている中外製薬の取り組みは、今後ますます注目されるだろう。

今回紹介した取り組みのなかからも、患者さんや医療の日常を変える想像を超えた医薬品・サービスが生まれてくるはずだ。中外製薬が起こすイノベーションにぜひ注目してほしい。

制作年月：2022年12月

中外製薬「患者団体との協働」
https://www.chugai-pharm.co.jp/profile/overview/patientcentricity/collaboration/

本コンテンツは、ヨミドクターに掲載されたものです。
© The Yomiuri Shimbun.